

## 桜山に眠る群像たち

### 最前列に並ぶ二十一人

会員 松永恵子

#### 一、はじめに

今年は幕末の長州藩を舞台にした大河ドラマ「花燃ゆ」が放映され、又明治維新後百五十年も間近に控え、県下の各地でも様々な取り組みが成されている。本会の会員でもある栗崎健さんの尽力により徳山七士慰霊祭も、没後百五十年の時を過ぎてつつが恙無く執とり行われた。

わたくしごとで恐縮ではあるが、十四、五年前、新南陽図書館の古文書講座に入会した。その時の最初のテキストが「奇兵隊日記」であった。奇兵隊日記はその日の当直の伍長がその日の出来事を記した記録である。

#### 奇兵隊日記

文久三年 十月二日 当直 藤村太郎

夜四ツ時(午後十時)澤様御脱走之事。同刻、河上弥一、白石廉作、伊藤百合五郎、長野熊之允、和田小伝次、小田村文之進、下瀬熊之進、井関栄太郎以上八人脱走之事。

と記されていた。実家の母から母方の四代前に奇兵隊士の兄弟がいると聞いていた事を思い出して母に尋ねてみると、まさにその当直の伍長と同名で、どうやら実在の人物のようである。図書館の「近世防長人名辞典」で調べてみると藤村太郎稻彦、大田絵堂の戦いで討死と記さ

れていた。手掛かりを求め防長回天史をコソコソと読み続け、関連の本や資料も調べてみた。その後、萩博物館の展示で思いがけず藤村兄弟の和歌に遭遇した。又下関にある桜山神社で、神霊碑三百九十一柱の最前列に兄弟の名を発見した時は大きな驚きであった。

この度、会誌三十七号に載せていただく機会を得、桜山神社建立に関わる、奇兵隊や設立の過程、又最前に並ぶ二十一人の紹介をしてみようと思う。



桜山神社社殿

二、光明寺党と奇兵隊  
桜山神社は、生野・但馬の変で戦死した八人の奇兵隊士を弔うために、高杉晋作が建立を提案した招魂場である。

文久三年（一八六三）長州藩は藩是を即今攘夷と定め、朝廷が命じた勅許を受けて、下関を通航する外国船への砲撃、決行のために藩の正規兵八百人を赤間関に待機させる。これに先がけて、京都河原町の長州藩邸で藩命により攘夷活動を続けている若い下級武士団も、三月下旬世子の許可を得、山口に下る。藩はこの一団に敵



光明寺

状探索の名目をつけて下関に入れる。藩の正規兵である世禄恩顧の臣に対し、あくまでも私兵的存在の彼らも藩の正規兵とは別の旗幟をたてる。光明寺を本陣にしたことから光明寺党と呼ばれた。

#### 防長回天史 第四編

文久三年、在京の士、久坂玄瑞、入江九一、山縣小輔、冷泉雅次郎、長野熊之允、馬島甫仙、赤根幹之允、蔵本付中間元森熊次郎、地方組中間野村和作、山下新兵衛組中間吉田稔麿、来栖源兵衛組中間藤村太郎など三十四人も世子に請い西下の途に上る。

#### 白石正二郎日記

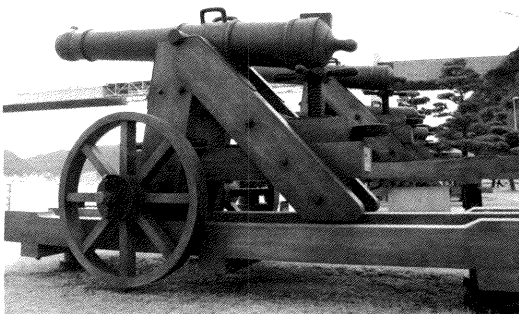
四月二十七日、俄に三十人出張に付、取斗に及び候。久坂君始三十人斗者、竹崎長泉寺へ宿に相成候。五月五日長泉寺の連中、細江光明寺へ転陣。

長州藩は関門海峡を通航するアメリカの商船ペンブ

ローク号を砲撃する。続いてフランスのキャンシヤン号、オランダのメデューサ号と砲撃するが、アメリカの軍艦ワイオミング号の報復攻撃を受けて、長州の軍艦二艘は撃沈、一艘は大破する。四



長州藩下関前田台場跡



壇ノ浦砲台の長州砲

ヶ国連合艦隊の兵士は下関の町に上陸して町を焼き前田砲台を破壊する。この思わぬ敗戦に激怒した藩主父子は、長州藩の経済の中心である下関を外国にとられると長州藩は滅んでしまうと考え、対策に高杉晋作を起用する。

#### 防長回天史 第四編

誠に機械適せず。士卒精ならず。守禦の策、出る所なし。公、之を聞いて大ニ怒る。高杉晋作を召して曰く「策ありしや」晋作「有志の士を募り一隊を創立し名づけて奇兵隊と言わん。」

六月六日藩主の意を受けた晋作は豪商で国学者でもあり、尊王攘夷運動を支援している白石正一郎の屋敷に入りここを本拠地として六月八日「奇兵隊」を結成する。

晋作は藩の正規兵に対する「奇兵」を使って近代兵器を備える外国軍にゲリラ戦法で立ち向かおうとした。晋作は士分なる武士階級以外の足軽・陪臣でも志があるなら入隊を認めた。ここに少数精鋭の民兵からなる奇兵隊

が誕生する。晋作は自ら初代総督となり光明寺党のメンバーも準正規兵の扱いを受ける奇兵隊に志願し、白石正一郎や弟の廉作も奇兵隊の会計方として入隊した。

やがて奇兵隊は武士階級五十パーセント、農民四十パーセントの混成部隊に発展していく。幕末の長州には奇兵隊に倣って、庶民的要素を持つ百六十の諸隊が誕生し、藩の軍事力の中核をなすようになる。

#### 三、桜山神社の設立と由来

やがて、奇兵隊は秋穂、三田尻と転陣する。高杉晋作は百六十石の奥番頭おくばんがしに抜擢され総督を退き、二代目総督には晋作の推薦で河上弥一と滝弥太郎の二人が就任する。奇兵隊は八月十八日の政変で都落ちした七卿の警衛を三田尻のお茶屋で務める。

そして、冒頭で紹介した、当直藤村太郎が記録した十月二日を迎える。

まず、七卿の一人澤宣嘉が脱走、続いて総督河上弥一、白石正一郎の弟・白石廉作等八人が脱走する。同年八月、

大和、五條で起きた天誅組の挙兵への合流を企てる。しかし途中の播磨で天誅組壊滅を知り生野銀山のある但馬（兵庫県朝来郡）に入り、農兵を味方につけて生野代官所を襲撃し、いわゆる生野・但馬の変を起こすが、農兵等の離反に会い河上弥一ら奇兵隊士全員は妙見山の山伏岩で自刃する。

この時山口にいた高杉晋作は、戦死した同志の霊を慰め、後に残る者も常に死を覚悟して時局に臨むべく、生墳（生きているうちに作っておく墓）の必要性を説き奇兵隊士全体の共同の招魂場を設けることを提案する。

高杉の意見に賛成した奇兵隊の人々は、実現に向かって動き出す。翌、元治元年（一八六四）白石正一郎は下関の新地に土地を購入し、奇兵隊士も当番制で開墾作業にあたる。三月二十九日馬関防衛の視察に訪れた三条実美も

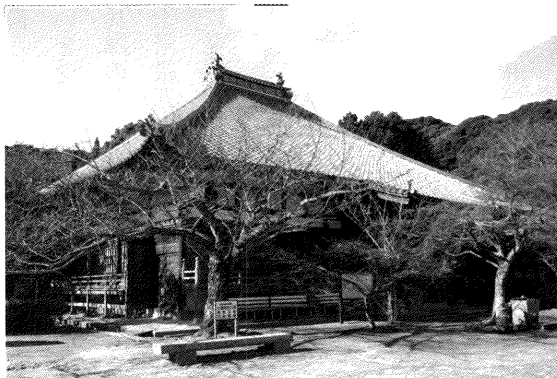
この地に立ち寄り、招魂場としての社殿の必要性を説いた。

その後、長州藩は七月禁門の変、八月四ヶ国連合艦隊の下関砲撃、第一次長州征伐、三家老の切腹と俗論派が台頭し時局は混乱する。

慶応元年（一八六五）一月十六日、元治の内乱の中、



功山寺山門



長府毛利家の菩提寺功山寺

高杉晋作をリーダーとする正義派が大田絵堂の戦いに勝利して正義派が藩の実権を把握した。

慶応元年八月三日、日本で初めての招魂場である桜山神社の完工式が執行された。

#### 奇兵隊日記

慶応元年八月三日、総督山縣有朋馬関行。招魂場祭祀の為なり。

#### 四、桜山神社最前列に並ぶ二十一人

十年位前、桜が満開の春、桜山神社を訪れた。三百九十一の神霊碑が六列に並ぶ様は、厳肅で整然としていた。最前列中央には吉田松陰を中心に右に高杉晋作、入江九一、時山直八、福田狭平と続き右端は山縣有朋で十一人並ぶ。左は久坂玄瑞、吉田稔麿、河上弥一ら九人の神霊碑が並んでいる。わたくしごとになり恐縮だが、母方四代前の兄、藤村太郎稻彦は松陰から数えて左に五番目である。弟の藤村英次郎稔彦は左端に並んでいた。

その場で読みとれる範囲内で二十一人の名前を控えて帰り、その後近世防長人名辞典や防長維新関係者要覧で調べて、年齢・生死年月日・身分・奇兵隊での役職等を一覧表に作成してみたのが別表である。一覧表にしてみれば二十一人の群像が輪郭として把握でき、おぼろげながら認識が深まるのではと思ったからである。

殆んどの人が明治維新の過程の中、重要な局面で亡くなっている。亡くなった年齢は、二十代が最も多く、身分は様々だが比較的足軽、中間クラスが多い。

神霊碑は二列目、三列目と六列



桜山神社御祭祀神霊

目まで続く。最後列には名前のない小者こものなども並んでいる。中央の松陰の神靈碑は多少規格サイズも大きいように見えるが、皆同じ規格でサイズも等しく並んでいるのを見ると、明治維新という偉業であつても、各々個人の生は等しく、同じ重みがあるというメッセージが込められているように思えた。



左端藤村太郎、左より6番目吉田松陰、同7番目高杉晋作

## 五、終わりに

桜山神社の設立を提案した高杉晋作は次のように述べ

ている。「強兵の本は人心こころを一にするにあるなり。人心一ならずんば、すなわち五事七計の謀りありと言へども、ついに百戦百勝の利を得る能あたざるなり。故に今日の強兵の急務たるや、まず二州の人心を一にするのみ。」  
明治維新という言葉わば革命には、強い精神的一体性を創出し革命の根本思想とするという考えである。

そのシンボルの一つが桜山神社の設立にあるのであろうが、今を生きる現代人の我々には、感覚として慮おもうことはできても、現実に理解し、共感することは、なかなか得難えがたいようにも思える。然し、彼らの足跡に、深穩に思いを懸け追悼の念を捧げてみるのも然りである。

古文書のテキストから、全く偶然に始まったことではあるが、まるで導かれるように偶然が重なり、様々なことがわかり桜山神社へと繋がったことは、奥深い内なるものへの不思議な道であった。

偶然は然りと言うが、まさに偶然が重なり必然の事となった。

時代は個人の生も死も何もかも呑みこんで、時の流れ

は過ぎてゆく。ただ個人の生きた命の煌きは、確実に各々、その色は違っても時代に織りこめられるのだと思う。

最後になりましたが、個人的にあたためていたものを会誌に載せて下さいました事を深く感謝し御礼申し上げます。

### 参考文献

- |           |       |          |
|-----------|-------|----------|
| 写真集 奇兵隊   | 一坂太郎著 | 奇兵隊研究所   |
| 奇兵隊日記     | 田中彰監修 | マツノ書店    |
| 白石家文書     |       | 下関教育委員会  |
| 防長回天史     | 末松謙澄著 | マツノ書店    |
| 防長維新関係者要覧 | 田村哲夫著 | 山口県地方史学会 |
| 近世防長人名辞典  | 吉田祥朔著 | 三一書房     |
| 桜山神社記     |       | 桜山神社     |
| 萩博物館展示案内  |       | 萩博物館     |
| 明治維新と宗教   | 岸本覚   | (講演)     |



桜山神社 (391 柱) 最前列の志士

藤村 英二郎稔彦	元森 熊次郎春幹	能美 平吾宣一	山田 鵬輔成功	藤村 太郎稻彦	交野 十郎瑞	河上 弥一正義	吉田 年麿秀実	久坂 義助通武	松蔭 吉田先生神靈	高杉 晋作東風	入江 九一弘致	時山 直八義直	福田 狭平公明	宮城 彦助盾忠	堀 潜太郎	阿川 四郎延実	不明	天宮 慎太郎行文	堀 滝太郎浪風	山県 狂介有朋
二十一	二十四	二十六	二十七	二十八	三十九	二十一	二十四	二十五	三十	二十九	二十八	三十一	四十	五十一	二十七	二十五		三十九	二十三	八十五
嘉永一、二、十三	弘化二	不明	不明	天保九、十二、九	天保六	天保十四、一、一	天保十二、一、二十九	天保十一、五	天保一、八、四	天保七、八、二十	天保八、四、五	天保九、一、一	文政十二	文化十	天保十三	天保十三		文化十	弘化一	天保九、四、二十二
明治一、一、六	明治一、四、二十七	明治一、七、二十七	慶応一、七、二十七	慶応一、一、六	明治六、十一、十四	文久三、十、十四	元治一、六、五	元治一、七、十九	安政六、十、二十七	慶応三、四、十四	元治一、七、十九	明治一、五、十二	明治一、十一、十四	文久三、八、二十七	明治一、七、二	慶応一、七、三		慶応一、一、六	慶応一、七、二十九	大正十一、二、一
士雇	清水家家臣	八組士	家老・戸家家臣	士雇	林組中間	八組士	士雇	藩医久坂家二男	八組士	八組士	無給通士	三十人通士	藩士	大組士	来栖組中間	木原組中間				無給通士
半隊司令	小隊司令	小隊司令	小隊司令	小隊司令	参謀	二代目総督		参謀	松下村塾塾長	初代総督	参謀	参謀	参謀	参謀	小隊司令	小隊司令		陣場奉行	小隊司令	三代目総督
戊辰戦争山城淀川堤戦死	戊辰戦争戦死	戊辰戦争越後負傷後病死	四境戦争小倉豊前戦死	藩内訌戦大田絵堂戦死	陸軍大佐病死	生野・但馬の交自決	池田屋事件負傷後自殺	禁門の交自刃	安政の大獄江戸伝馬町刑死	下関にて病死(勞咳)	禁門の交自刃	戊辰戦争越後朝日山戦死	戊辰戦争越後病死	奇兵隊先鋒隊闘争事件賜死	戊辰戦争越後戦死	四境戦争小倉豊前負傷後病死		藩内訌戦大田絵堂戦死	四境戦争小倉豊前負傷後病死	小笠原邸にて病死
従五位	正五位	従五位	正五位	正五位	従五位	従四位	従四位	正四位	正四位	正四位	正四位	正五位	正五位	正五位	正五位	正五位		正五位	従五位	従一位